

一 祈禱師の精神障碍について

金澤醫科大學精神醫學教室(主任秋元教授)

松 原 太 郎

Taro Matsubara

(昭和22年11月17日受附)

祈禱は都會に田舎に今尚ほ根強い勢力を持つて居る。相當の教育を受けた知識人が祈禱師のまわりに醸し出される怪しげな雰囲気魅惑せられ其の虜になる。迷信であることを知らない譯ではないが、この奇怪な事象を的確に理解することが出来ない爲である。又祈禱は暗示療法として奇效を奏することがある爲に文化の低い大衆を惑はして正しい医療の普及を妨げて居る。殊に敗戦後の現在この種の迷信が流行していることは看過しがたい事實である。最近我々は一祈禱師に發した精神障碍の一例を経験したので報告する。

觀察例. 30歳の女祈禱師。家族歴。伯母が不明の精神病であり、兄はだらしない生活を送り正業に就かず家出をして遊び廻はり些細な理由で家人に暴行したり浪費が甚しく精神病院に入院し變質者と診断せられたことがある。本人は男のような磊落な性格で小學校の學業成績は略中位であつた。両親共に信心深く14歳の時から寺参りに連れて行かれ18歳の時に九萬坊と云ふ加持祈禱をする寺に参詣して夢判斷をして貰ひ、それが良く當つたのが動機で祈禱を信ずる様になつた。夢判斷とは夜半1時から早朝5時にかけて見る夢を正夢であるとして、これによつてさきのことを判斷するのである。本人はこの夢判斷の體驗を「夢を見させて戴き、合はさせて戴いて居る」と云つて居る。21歳で結婚したが姑が嫉妬心が強いと云ふ理由で婿家先きを逃げ出し、其の翌年再婚したが夫より淋毒が感染し、このため激しい下腹痛に悩まされたのが動機で一心寺と云ふ淨土眞宗の寺に加持をうけに行つた。この寺の住職は只患者を見ただけで過去、現在、未來、と分けて説教をきかせ病魔を退散させるのであるが、本人はこの住職の説教によつて非常に身體が楽になつたように思はれたので以來熱心な信者になつた。この寺で合掌

して居る間に初めて彌陀如來の聲を聞き姿が心眼に現れるやうになつた。本人はこの體驗を「始めて靈感を戴いた」と云つて居る。然しこの結婚生活も信心が段々昂じて、家庭をかへりみず、家財を乞食にやたらに施すなど非常識な行動がつのつたため約1年で再び離婚になつた。本人は少しも意に介せず「信仰の道を極めて偉い者になり、世の中の人達を助ける」と云ひ始め、又「貴方にあらたかな神様がついて居る」と或る行者に言はれて以來愈々狂信の度がつのり入浴に行くと風呂屋で頭から水を數十杯も浴びて「禊」をするので風呂屋から文句が出たり、両親や兄弟を天神様に連れて行き、神前で祈つて居る中に「菅原さんがおでましになつた」と男のような聲を出したりした。本人は「菅原道真公の姿が見えた」と云つて居る。25歳の時に第3回目の結婚をしたが夫が薄給であるのを理由に逃げ出した。其の後は家政婦をして居たが生活が困窮して投身自殺を企てたこともある。絶えず下腹部が痛み医療を受けても良くならず信仰すれば楽になつたので愈々祈禱師になつて生活しようと決心して或祈禱師でお告げによつて藥草を處方する男のところに入門し、更に九萬坊と云ふ眞言宗の祈禱所に入門して一心に修業を重ねた。其處で施術して神経痛を全快させた女と親しくなり更に其の女の夫と關係を結ぶようになつた。これが現在の夫である。34歳の時に祈禱師の免狀を貰つて自ら開業した。始めは豫言が良く當り出張も屢々頼まれて毎月600圓位の収入があつた。昭和21年4月～5月頃に西田天香氏の本を讀んでから、これが良いと信じ込み今迄やつた事もない神佛の安置場所を移動させたり、下水の掃除をしたりし始めたので夫が注意しても「信心が足りないのだ」と稱して聞き入れなかつた。行動は次第に狂信の度を加へ水垢離をするのだと云つて夜中に飛び出したり、海や湖水に行つて頭から水をかむつて「禊」をしたりした。浴場に行くとき脱衣場で着物や下衣類を引き裂き金蘭の袋を大切に戴

く、入浴中に南無妙法蓮華經を唱へる。入浴してゐる婦人の腹部を擦る。自分の子供を頭迄すつかり浴場に浸して「禪」をさせ、傍の者が注意をすると「お前さんの子ではない」等と其の人に湯や水を引きかけたりした。又夫が前の妻と未だ手が切れていないと嫉妬することが多く家庭には風波が絶えず、其の爲か本人は最近精神統一が出来なくてお告げが當らなくなつたと云つてゐる。昭和21年11月末からは更に奇行が劇しくなり夜は駐車場の待合室で明かして浮浪者を掴へては「ルンペンが居ては世の中が駄目になる。食物を施すのだ」と説き廻つた。又夫が金のことで一寸注意すると「私を疑ふ」と怒り夫に飛びかゝつて頭を殴り、夫が立腹して患者を叩くと「人殺し」と叫んで家を飛び出してしまふ。戸外から石を投げて「殺してやる」「父さんが死ぬか私が死ぬかどちらかだ」とか「父さんが子供を殺す」と云つてふらふら歩いて居るところを警察に保護せられた。浴場では頭から頻りに水をかむり祈禱をして周囲の浴客に水をかけるので誰も入浴することが出来ない。浴場主が無理に引き出さうとすると桶を振り上げて、「殺せ、殺せ」と板の間を踏み鳴して暴れた。又町の四つ角で辻説教をしたり歌を歌つたりした。それで12月4日に入院せしめられた。其の夜は著明な躁状態を示して男の様な大声を出して歌つたり多辯であり、刺戟性で看護婦に飛びかかつたりした。翌日は衣服を細かに破り素裸になつて食事や検温を拒み、「オーケー」、「グッドバイ」と叫んだり醫師や看護婦の行動を一々辛辣な言葉で非難したりして居たが入院後4日目から鎮靜し6日目にはすつかり溫和になつて良く試問に答へる様になつた。身體的に異常なく「ヒステリー」徴徴を認めず、血液、腦脊髄液所見も正常であつた。又精神も落ちつき顔貌、舉動、談話、感情、意志、計算等略正常であつた。入院當時のことは追想困難であるが、他に記憶記録障害はない。祈禱の様子は數回實驗したが毎日略同様であつた。今其の様子を記述して見よう。先づ「親類の者で外地に出征した儘復員しないものを占つて貰ひたい」と依頼する。患者は正坐して威儀を正し、目を閉じて合掌祈念する。合掌した指先が細かく震へ始めそれが次第に大きくなると急に太い底力のある聲で話し始める。「皇祖、白山大權現、東西南北、天地、左足より敷居を跨ぎ十二念佛を唱へます。信者の名前、住所、年を聞かせて戴きます」。手をあげて呪文を次々と唱へる。それが經文になり歌ふ様な調へになる。やがて急に靜になると壯重な聲で、「戦地へ行かれた方は長男で眉が太く

て毛が濃い、面長で母方に近い顔です。歸られる時期は櫻が散り青葉が芽をふく頃と思はれます。小さいときに脊髄を病んだことがあるでしょう」と合掌瞑目しながらお告げを述べる。「今どんな具合に生活して居るか」と問ふと祈禱師は再び經文を小聲に唱へ始める。「應召」、「そして」、「手帳」、「握りて」、「確りと太刀を握りて」と小聲な獨白が次第に大きくなりやがて突然すつくと立ち上り右手を腰にあて刀の柄を握つて抜き放つ動作をする。それが了ると、虚空の一點を見詰め乍ら「右手に太刀を持つて堂々として居らつしやいます」と云ふ。低い歌聲で、「君の爲惜しからざるなむこの命」と和歌を讀むように呟く。「顔を書いて下さい」と云ふと白紙を展げて女のような顔を書いて見せる。その描く顔かたちは稚拙で殆ど毎回同様である。「何か家に傳言はないか伺つてくれ」といふと合掌して一心に祈念した後半眼を開いて答える。「我々は内地に歸る支度をして居る。弟達に持つて歸るものは十分に持つことが出来ない。身體はお蔭で無事に過して居る。準備しつつあり、無事に歸る。我々の部隊は少數で宿舍の隅に準備して居る。お父さんに宜しく、さよなら」。斷片的で口調も音聲も急に男性化する。一心に我が子の歸國を待つ両親がこの豫言めいた言葉に心を奮はれるのも尤もと思はれる。時には其の聲が餘りに我子に似て居るので思はず我子の名を呼んで祈禱師に飛びつく母親もあると云ふ。

祈禱の様子を觀察して居ると合掌瞑目して呪文を唱へる中に手が震顫を始めて漸次意識の變化が起り顔貌舉動も甚しく平素と異なり音聲も男性化し芝居じみた大袈裟な身振りによつて空想する人物を表現するのである。即ち自己暗示による人格變換の状態である。此の様な現象は古來「神憑り」又は「口寄せ」と稱せられ巫子、靈媒によつて行はれる降靈現象に外ならない。降靈術は現實の肉體の外に靈魂があり肉體の死後不滅の靈魂が残るとする信仰に由來するもので特に未開人の間には疾病の治療にまで應用される。我國の「アイヌ族の間では現在尙ほ「つす」と稱する一種の巫子が託宣を行ひ病氣を治療してゐる。彼等の用ひる特異な服裝、莊重な口調、單調な經文等は自他相互の暗示状態を高め感應を誘起せしめる手段に外ならない。此の法悦に似た雰囲気の中でも總ての人が感應状態

松 原 論 文 附 圖



祈禱の最高潮，合掌した指先が細かく震える。



祈降靈の顔と稱して書いて見せる子供らしい繪。

に陥入るのでなくて推感性が異常に高まつて居る精神變質の素質を有する者がこの状態に入るのである。祈禱師とは此の様な異常人格を有する者、即ち精神病質人格者が呪文や夢幻的動作を修業して自己暗示を練習することによつて職業的に容易に人格變換の状態に入り得るようになった者と理解すべきである。本例の發揚状態を考察するに、患者は女性であるが、常に頭髮を短く刈り墨染の衣を着て異様な風體をして居り、祈禱の時には演劇的な大袈裟な舉動をする等顯揚欲の亢進が目立つて居る。又空想力が盛んで故意に空想中の人物となり、想像の趣く儘の言動をする。之等は所謂ヒステリー性性格若くは顯揚欲型精神病質の基本傾向に他ならぬ。本例をヒステリー性性格者として見れば暗示による人格變換、些細な不満に依る異常な感情暴發、入院時の劇しい躁状態、頻回な離婚、強烈な嫉妬心、偏執的な觀念等が良く理解される。お告げと稱して「希望する人の姿がはつきり浮び出して来る」とか「どこからともなく傍から聲がきこえて来る」と云つて居るがこれは自分

の考へが單に感覺性を帯びた假性幻覺とも稱すべきものであつて之に基いて「靈が乗り移る」と云ふ精神病質性假性妄想が發展したのである。所謂祈禱師の中にはかかる病的性格者がすくなくない。

本例はその後電氣衝擊療法を連日反復したところ第15回目から日附け、自己の年齢、夫の姓名を想起出来なくなり、祈禱の文句もすつかり忘れてしまひ、第18回目には自己の姓名は勿論、男か女であるかも判らず、攝食も自發的に出来ない等完全な電擊痴呆状態に陥つた。この痴呆状態は治療中止後1ヶ月で大部分恢復したが、祈禱の文句は容易に想起出来なかつた。退院後2ヶ月目に家庭訪問によつて觀察したところでは祈禱は全然行つて居らず、病的な行動も全く見られず温和な主婦として生活して居た。本例の様に病的性格の基地の上に發呈した躁病状態が電氣衝擊療法によつて鎮靜し同時に又靈媒としての能力も消失したことは興味ある事實である。

終りに秋元教授の御指導竝に御校閲を深謝する。

文

- 1) 秋元波留夫、「スピリチズム」と精神障病、日本醫師會雜誌、第21卷、第2號、95—98頁、昭和22年。
- 2) 橋健行、夫婦に現はれたる所謂祈禱性精神病の一例、神經誌、第15卷、第1號、67—68頁、大年5年。
- 3) 森田正馬、余の所謂祈禱性精神症に就て、神經誌、第14卷、第7號、286—287頁、大正4年。
- 4) 森田正馬、パラノイアに就て、神經誌、第15卷、第7號、369頁、大正5年。
- 5) 佐藤正治、所謂祈禱性精神病

獻

- の一例、神經誌、第37卷、第2號、99—104頁、昭和9年。
- 6) 内村祐之、秋元波留夫、石橋俊實、「アノマ」の「イム」に就て、神經誌、第42卷、第1號、1—69頁、昭和13年。
 - 7) Jaspers, K. Allgemeine Psychopathologie. Berlin 1923.
 - 8) Schneider, K. Die Psychopathische Persönlichkeiten. Leipzig. 1940.
 - 9) Schneider, K. Psychiatrische Vorlesungen für Ärzte. Leipzig. 1936.

<p>東京都文京區(振替口座) 春木町三ノ三二(東京一四九)</p> <p>新保健婦讀本 上巻A 5判 一八〇頁 下巻B 5判 一八〇頁</p> <p>南江堂</p>	<p>小宮山新一著</p> <p>◆新産婦人科学 婦人科編 B 5判 三五〇頁 木部編 B 5判 三五〇頁</p> <p>◆新産兒病學 A 5判 三四〇頁 B 5判 三四〇頁</p> <p>◆小兒科学 A 5判 三五〇頁 B 5判 三五〇頁</p> <p>◆臨床小兒結核學 A 5判 三四〇頁 B 5判 三五〇頁</p> <p>◆胸廓成形術の臨床 A 5判 二六〇頁 B 5判 二六〇頁</p> <p>◆醫用統計學綱要 A 5判 一四三頁 B 5判 一四三頁</p> <p>◆電氣殺菌研究班編 A 5判 五〇頁 B 5判 五〇頁</p> <p>◆水島治夫著 A 5判 一四三頁 B 5判 一四三頁</p> <p>◆醫用統計學綱要 A 5判 一四三頁 B 5判 一四三頁</p> <p>◆宮本忍著 A 5判 二六〇頁 B 5判 二六〇頁</p> <p>◆藤良象著 A 5判 三四〇頁 B 5判 三五〇頁</p> <p>◆山本康裕著 A 5判 三五〇頁 B 5判 三五〇頁</p> <p>◆小南吉男著 A 5判 三四〇頁 B 5判 三四〇頁</p> <p>◆八木日出雄著 A 5判 三五〇頁 B 5判 三五〇頁</p> <p>◆小林芳人著 A 5判 二一〇頁 B 5判 二一〇頁</p> <p>◆中村文平著 A 5判 二八〇頁 B 5判 二八〇頁</p> <p>◆廣瀬孝六郎著 A 5判 三五〇頁 B 5判 三五〇頁</p> <p>◆工・醫博 A 5判 三五〇頁 B 5判 三五〇頁</p> <p>◆眼結核 A 5判 二八〇頁 B 5判 二八〇頁</p> <p>◆藥理學實習講義 A 5判 二一〇頁 B 5判 二一〇頁</p> <p>◆病理學提要 A 5判 六〇〇頁 B 5判 六〇〇頁</p>
---	--